

《座談会》 同志社の

音楽を語る



出席者 (ABC順)

女子大学教授	有賀のゆり
女子大学名誉教授	片桐哲
中学校教諭	本宮啓
元中学校嘱託講師	中堀愛作
女子中高教諭	野村芳雄
中学校教諭	小倉恵子
女子大学教授	小鷲淵紹子
高等学校教諭	津田能人
大学教授	山田忠男
(司会) 香里中高教諭	西邨辰三郎

はじめに

司会 同志社は、日本の代表的キリスト教学園として九十六年の歴史をもっておりますが、とくにキリスト教学園としては欠くことのできない礼拝や宗教音楽について心を砕かれた諸先輩がご健在である今日、同志社の音楽教育に携わっている現役が、相会して過去を省み、現在を直視し、未来を夢みることは大事であることを痛感しておりました。幸い編集部のご賛同もあって、今日こんなに大勢の同志が、心を開いて語る機会を与えられましたことは有難いことだと思えます。お話しを進め方には、いろんな方法があると思いますが、今日は余りかた苦しい気持でなく、まあ先輩順にでもお話をうかがい、自然、同志社における音楽の歴史がわかり、ひいては現在から未来へと話が及ぶようにしてみても思っております。

ところで、明治以後日本に西洋音楽が入ってまいりましたのは、おおまかにいって二つの系統があったと思うのであります。一つは上野の音楽学校へ、一つはキリスト教宣教師を通じて、ミッションスクールへ入った系統

でありましょう。その辺から、このうちではいちばん先輩にあたられる片桐先生からお話をうかがえませんか。

同志社の音楽的雰囲気

片桐 今のお話しであります。音楽学校の方はしばらくおくとして、ミッシェンスクールでは、例えば青山学院や関西学院は、メソジストの創始者ジョン・ウエスレーやチャールス・ウエスレーが音楽愛好家であった関係から、日本の伝道のためには、音楽に堪能な宣教師が沢山来られました。ところが同志社はミッシェンスクールというよりは、日本人である新島先生が、米国でピューリタンの精神をもっとも強く受け、日本救済というような立場から学校を創設し、明治九年には熊本バンドも合流して、武士の血のようなものも流れていたのです。先の学校などとは、雰囲気違っておりました。声を出さず言えばまず詩吟ぐらいなものでした。しかし地方の伝道に従事していた組合派の宣教師の中には、音楽に堪能な宣教師があつて、例えば札幌のローランド先生のような人がいて、歌もオルガンも上手で、その人の感化を受けて牧師にな

るため同志社に來た渡辺守成君とか海老沢亮君という人もいました。また仙台にはミセス・デフォーレスト、ミス・ブラッドショウなどという宣教師の感化によつて、同志社の礼拝で、讃美歌合唱を奨励した、もとの予科長速水藤助氏や、神戸女学院の宣教師に影響されて音楽に熱心ないわゆる神戸バンドといわれる学生たちの入学によつて、同志社の音楽的雰囲気はとみに醸成されていったのです。同志社は前にも申したように音楽というものについては、実に疎遠な学園でした。

司会 明治二十一、二年ごろ、まだ新島先生がいらいしたところでしよう、何か音楽の才能のある学生たちが手風琴やコルネットや太鼓を集めて小さい楽隊のようなものをつくつたが、その演奏態度がずいぶんふまじめだといふので、学生中の信仰家や勉強家から軽蔑をうけたというようなことをある本で読んだことがありますが……。

片桐 ええ、そういう空気、すなわち音楽をやる者はにやけた奴だ、というような空気はひじょうに濃厚だつたと思います。

司会 それから、オルチンさんという方が、同志社で学生たちに讃美歌を教えられた

ことも同志社五十年史で読みましたが、どういふ事情であつたのでしょうか。

片桐 そのころ、神学校では、音楽を勉強しなけりや、ほんとの牧師はできないということ、学生たちの声を聞き入れて、神学部の教授会が大阪の宣教師であつたオルチンさんを一週間に一度招聘して、神学生に音楽の基礎から教えたというのが、同志社のはじめての正規の音楽授業でしょう。オルチンさんは古い明治の讃美歌編集委員の一人でした。

司会 先生は明治三十七年にご入学になつたことを書いていますが、そのころの学内音楽模様をお話しくださいませんか。

片桐 私は遠方から來ましたから、寄宿舎生活をしておつた。寄宿舎生活というものにはひじょうに殺風景であるから、何とかもう少し情操のある雰囲気をつくらなければならぬといふ、そういうことから私はベビーオルガンを買つて歌の好きな学生を集めて小さい合唱団のようなものをつくり、主として讃美歌の練習をしていたわけです。

司会 大学グリー・クラブの胎動期ともいえますね。明治四十四年ぐらいでございましたか、グリーが組織されましたのは……。



片 桐 哲 氏

片桐 はい。そのころです。

司会 われわれ全同志社人がいま愛唱しておりますメレル・ボーリス先生の「カレッジ・ソング」ですが、あれはたしか明治四十一年につくられたと思いますが、ボーリスさんに校歌をつくっていただくようになった経緯についてお話しくださいませんか。

片桐 私どもそういうさやかな学生の音楽団をはじめましたら、それをひじょうに喜んで、奨励してくださいのが神学部教授であるギュリッキさんで、同志社にも校歌が持てたらどうだろうと考えられて、当時、近江八幡の商業学校の英語の教師をしていられた若い詩人である、ボーリスさんに、「あなたひとつ詩人だから作詞してくれないか」とい

うわけで、それがあれができたわけなんです。

司会 グリーができたころは、学生たちの音楽は、讃美歌中心で、しかも、練習は、祈禱で始められたそうですね。実は私のころもグリーは祈禱で練習をはじめていました。

片桐 はい、そのとおりです。私はギュリッキさんからエル大学のグリー・クラブの本なんかを拝借したことがたびたびあります。実はグリーという名もそうした縁がもとで、私は私たちの仲間の合唱団をもグリー・クラブと呼ぶことにしました。また、そのことは、愉快に歌うという意味もあることはご承知のとおりです。

私は宗教音楽のほかにもう少しくつろいだ青年らしい歌を歌わせたいという気持ちもあって、同志社グリー・クラブという名をつけたわけです。ところが、そのころグリー・クラブは、教会や伝道集会に呼ばれることが多く、自然讃美歌中心の団体になってしまったことは否めません。そこで、その後、宗教音楽とともに民謡とか一般歌曲の研究をやりたいというグループが生まれました。それがプリムローズ・クラブなんです。できたのは大

正二年ころでしょう。

司会 私は大学在学中、プリムローズに属し、その指揮をやらされましたが、あの時も法学部や文学部の学生が多く、体軀堂々としたスポーツマンなんかが大勢いました。グリーほど宗教的で芸術的ではなかったけれども、元気がいっぱいワンワン歌っていました。(笑)

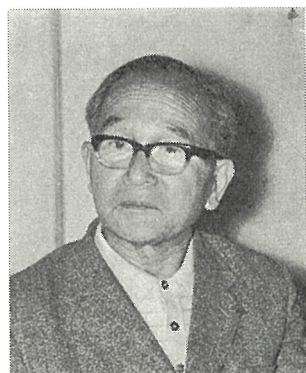
片桐 ことに体格のよい運動家が多かったですからね、声量も豊かでした。

司会 そのプリムローズからマンドリン・クラブというものが正式に誕生したことは、同志社五十年史に三輪先生が書いておられますが、たしか大正五年ごろかと思います。

片桐 ええ。グリーやプリムローズに属しておって、器楽に興味のある者が、はじめはクラブの余技としてやっておったのが、だんだん発展していったんですね。

山田 日本でのマンドリン合奏というのは同志社が最初なんです。マンドリンそのものは、上野や宗教音楽とは別の系統で入ってきたんです。合奏は明治四十四年くらいからです。

片桐 マンドリン・クラブが独立してからは、全国の競演会で優勝いたしました。同志



中堀愛作氏

社と慶応がたびたび鎗を削りました。

山田 宮内省の武井守成さんが始終プレクトラム音楽の大パトロンになっていましたね。

司会 さて、今度は、中学校の方からお話しをうかがいたいのですが、中学の音楽の歴史はいかがなものでしょう。

中堀 最初は、ジュニア・グリー・クラブというのが私の来る前にできていました。組織されたのは、大正五年の四月ときいております。私が来たときは大中寅二さんが指揮をしていたんです。それからジュニア・グリーから独立して音楽部ができ、次第に盛んになっていったんですが、困ったことに、その中の悪いやつが、彰栄館に入って答案を盗んだ

りましてね。(笑)それで三輪先生がおこつて、これはもうぶっつぶさなきゃいかんというので音楽部をつぶしてしまつたわけです。そのころに柳島彦作さんが学校へ帰つてきて、生徒の音楽の好きなのが集まって合唱をつくつた。そのときに期せずしてできた名前が「ホザナ」なんです。そのころはホザナ・クラブといっていました。大正十一年です。

司会 先生は、ただいま期せずしてできた名前とおっしゃいましたが、命名者はいなかったのでしょうか。

中堀 はい。それはまあ生徒でしょうね。それから戦争が近づいてきますと、讚美歌なんか歌うやつはだめだ、ぶっつぶさなきゃいかんと。そこでできたのがブラスバンドです。これは軍楽班ということで優遇されていたんですよ。

司会 私の在学中、女学校のほうでは、たしか女専で「ミリアム・クワイヤー」というなかなか美しい合唱があり、寮を中心にできたということを聞いておりましたが……。

野村 女専の方はミリアム・クワイヤーと称し、高女部の方は、フレンドリー・クワイヤーといっておりました。フレンドリーはヒ

バード先生が最初指揮をしておられました。

司会 あのころのミリアム・クワイヤーは、何となく宗教と音楽が一致したような気品高い雰囲気をもっていて、さすがに同志社だなぁと思えました。それがいつの間にか消えてしまった。女専のミリアム・クワイヤーと、大学のグリー、プリムローズが混声合唱団を組織するという新気運が生まれたのではないのでしょうか。

片桐 教会では男女合唱で歌っておる。ところが、同志社内部で混声で歌うという機会はあるとない。だんだん歌が上手になると彼女らは男声のテナー、ベースがほしいんですね。けれども、同志社当局はそれを許さない。道徳的な、男女間の純潔というものをかたく守るために、そういう機会を与えないというようなことで、しかし、要求はひじょうにつよかつたわけですよ。

私が混声合唱団を組織しようとしても、ミス・デントンをはじめ、松田道校長、女子部なんか猛反対です。そこで海老名総長に訴えたところ、「それじゃ、だれか監督役があるならば考慮しよう。」ということで、神学部の教授であつた私が、練習ごとにうしろに坐つ

てお目付役をしておった。

司会 そもそも日本の大学で男女共学というのは、同志社が最初じゃないですか。海老名先生のいわゆる男女同格論の具体化として、混声合唱を奨励されるのなら話はわかるが、それととかくいわれるのは、やはりデントンさんと松田女史などが、風紀について心配されたからに外ならないと思いますが、その点片桐先生いかがですか。

片桐 音楽の歴史では、いかに道徳的に堅固なものであるかということを認識させなければ、音楽団体の存留の意味は、ことに同志社においてはなかったわけですね。

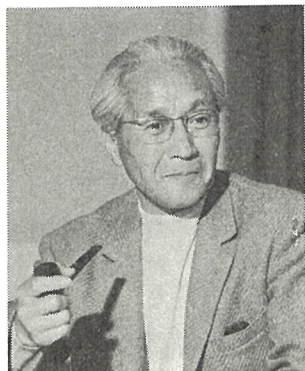
司会 まあ、いろいろ問題はあったでしょうが、とにかくはじめて同志社混声合唱団がデビューしたのは、大正十四年の創立五十年記念のイブ音楽会からではなかったでしょうか。

片桐 それまで反対しておったミス・デントンや松田校長も、はじめてその合唱をきいて、「すばらしいですね、片桐先生」といったですね。まあ認識がすっかり変わってしまっただけです。

司会 同志社混声合唱団の最初の指揮を

したのは、今なおかくしゃくとして楽壇に寄与しておられる柳兼子先生だったのでしょうか。たしかヘンデルのハレルヤコーラスの合唱で、すごく好評だったとか……。

それから、あのころ同志社イブというものは、同志社の年中行事のハイライトで、中堀先生が「ホザナ」をおやりになったり、グリ、プリムローズの両大学合唱団や、いま話しの出た混声合唱団、それから女学校のコーラス、それにマンドリンクラブの立派な演奏がありました。またシャイベリー先生のバリのソプラノ独唱などが、いまなお私の耳に残っています。あのころすでにオーケストラというものはありましたね。またその頃は学校



山田 忠 男 氏

側はもとより学生側も校友、同窓も一体となった同志社らしい空気が溢れていました。聴衆には新島先生の八重夫人の顔も見えていたのを覚えています。最後にはオーケストラの伴奏で、会衆一同がワンパースを高らかに歌い、同志社カラーで満たされました。そのオーケストラについてありますが、すでにあのころ正式に校友会に入っていたのですか。

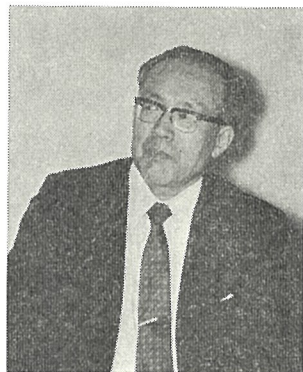
山田 もちろん、正式に入っていました。

司会 どういう経緯でできたかご存知ですか。

本宮 聞くところによりますと、当時のプレクトラム音楽にあきたらない連中がマンドリンの一部の人と一緒に、第一回のコンサートを大正十三年に開いたということです。

司会 ご列席の野村先生は中学校のホザナクラブの優秀なメンバーとして、中堀先生の指揮のもとでまじめに歌っておられたのをよくは覚えている。(笑)

野村 私の母は琴の師匠でしたから、幼少の頃はもっぱら邦楽に親しんでいました。しかし私が同志社に入ってから、毎朝の礼拝で讃美歌を歌い、ホザナ・コーラスの訓練を受



野村 芳雄氏

けましてからは、合唱音楽の美しさ、ハーモニの妙味を知り、次第に西洋音楽の方へ傾いてゆき、ついにそのとりことなっていました。

司会 あなたが音楽家になられたのも、おそらくホザナの影響力によるのでしょうか。

野村 まったくそうだと思います。

司会 今でも思い出すことは、私の中学時代でしたか、ふと近くの室町通を歩いておりましたら、室町教会のステンドグラスをとおしてすばらしい歌声が聞こえてきました。あれはこの合唱だろうと聞いたなら、同志社の生徒だということでした。今から思うとホザナの合唱ですね。その瞬間、同志社はいい学校だな、入りたいなとは思いました。あ

のときはもうすでに中堀先生がやっていらしたんじゃないですか。私が同志社予科に入ったのが、大正十五年ですから。

中堀 それじゃそうですね。ところで、いま先生はホザナを聞かれ、同志社はいい学校だなと思われたそうですが、実は私が同志社中学の教師として赴任しましたときは、音楽という授業はなかったんです。末光先生が校長になって来られたときに、音楽がなかった。同志社ともあろう学校が、音楽を教えないとはびっくりちゃだといひ出したのが柳島さんです。どうしても音楽の授業をやらなきゃいかんというので、ついに柳島さんも私も音楽の先生の免状もないんですけど、とにかく二人で生徒をチャペルに集めて、音楽の授業を始めたのです。

司会 強硬ですな、なかなかそれは大したことですよ。

中堀 柳島さんが大きな声で歌を歌うんです。それで私がまずいけれどもピアノをひいて……。それが中学校としては、授業としての音楽の始まりです。

司会 ありがたいことですね、その当時の模様が目の前に浮かぶようです。私学にはそ

のような熱情がなければ駄目です。

本宮 話はかわりますけど、新島先生の遺品の中にフルートがあるんですね。以前、田中総務課長から、アメリカでは、人間には理性のはかに情操も大切にしなければならんだということ、ハーディー氏が新島先生に買い与えられたとか、そんなことを聞いたんですけどね。

山田 同志社での交響楽関係の桜井忠一先生、あの方が実際その笛を見たし、音も出したことがあるというんです。

ちょうど昭和二十五年の創立七十五周年のときに、ぜひその笛を使って山田、吹け、戦後の同志社でもって鳴らせと、ずいぶん田中さんが探してくれた。桜井さんから聞いたんだけど、ついにわからず、遺品庫の中にかつてあったんだが、それがいまはない。

だれがお金持が新島先生に、「おまえ、あんまりまじめ過ぎて一本気過ぎる。」というので買い与えたという話だったんですね。あまりお吹きになったということはなかったらしい。(笑)

司会 話がちょっと前後しますが、『同志社五十年史』にこのような記事があります。

明治三十九年二月十七日、同志社公会堂で、東北地方飢饉救済慈善音楽会を催したことがある。これは当時、神学校の教授であった日野真澄、今泉真幸の両氏をはじめ同志社に在学の十三名の東北人によって催されたもので、同志社からは三十余名の合唱隊が出演し、それに加えて京阪地方からも多数の人々が出演して、なかなか盛んな音楽会であったそうです。従来京都での音楽会といえば、プログラムの半分は和楽であったのを、この音楽会は全部が西洋音楽であったので、このような音楽会は、京都でははじめてであると書いてありますが、歴史的にもおもしろい記事だと思います。

山田 京都でいわゆる明治音楽会式のもはみな和洋合同でした。十字屋ができたのが三十年なんですよ。それから吉田恒三さんがちょうど師範学校の教授で来られて、それから京都音楽会というのが三十五年からあるんです。これはいまの鴨沂の講堂を使ってやりました。それには必ずお翠、当時は京極流の創始者鈴木鼓村だとか、「戦友」を作曲した三善和気とか、そういう連中の出演がある。だから、おすなおすなで大繁盛なんです。その



本 宮 啓 氏

ころはまだその程度であったんですね。

司会 いわゆる洋楽が日本に渡来したのは、上野の森もさることながら、キリスト教関係の方からがもっと盛んじゃなかったのですか。

山田 信長のころ、元龜、天正のころにオルガンが入ったという説もあります。明治以来は、明治十一年に日本に三台入ったんです。その一台は京都の盲学校にあるんですよ。オルガンといったってリード・オルガンですよ、それが上野と学習院と、当時できた京都盲啞院へ皇后陛下がとり寄せて、それを寄付なすったんです。それに同志社が続くんです。

片桐 チャペル備えつけの空気入れだね。
山田 しかしチャペルのはメーソン・エン

ド・ハムリンで上等なんです。いまだどうしたか知らないけど。

鴛淵 ありますよ、私の部屋に。

小倉 女子大のほうへ？

鴛淵 同志社中学が売り飛ばすといわれたので、それでもらっちゃったんです。

小倉 女子大にパイプオルガン科ができるということで中学がお譲りしたんです。(笑)

司会 同志社にパイプオルガンがまいましたのは、長いデントンさんの教育功勞のために米国の婦人団体が、寄付されたという美談について聞かせてください。

デントン先生とパイプオルガン

片桐 たしかデントン先生が同志社女学校に來られて五十二年目ですか、その功勞を記念するため、デントン先生を同志社に送って、おるロサンゼルス第一組合教会の婦人会が主体になって、デントン先生をわれわれの名譽だから表彰しようというのが動機になって、デントン先生に何がほしいかと相談されたわけですよ。そのときに、礼拝堂に備えつけるパイプオルガンがほしいとデントンさんはいいました。しかしパイプオルガンはその当時ア



氏 子 紹 淵 駕

アメリカでも、相当の費用がかかるものですから、いいだしたアメリカ側もちょっと面くらった有様でした。まあ断わりきれなかったのでしょうね。しかしクラップ先生は、余り金がかかるとならエレクトリックオルガンを二台ぐらい買うたらよからうといわれたこともありました。しかし、デントン先生と私は、時間はかかってもいいからパイプオルガンがほしいと、こう言いました。ところが、あの建物それ自身がチャペル式になっていない。京大の武田五一先生の設計で、オーディトリウム式なんですね。デントン先生は前からあれを礼拝堂にしたい、パイプオルガンを入れたいといっておられた。しかしでき上った建物は天井が低いのでデントンさんはひじょう

に失望された。実はあの建物も長い間、パイプオルガンを入れるというわけで、うしろは吹きぬけのかべでした。ですから、私のようなはげたものが礼拝に坐っていると冷たいすき間風が上からおりてきて、頭が寒かったわけです。そんな不自由をものしんでいるうちに、アメリカの方でもついにデントンさんの情熱にほだされて、パイプオルガンを送るということになり、その後、モラー会社の副社長が来日して、栄光館の設計を詳しく調べて、二階の隅々まで聞こえるように設計をはかっていったわけです。そうしてその後数年はかかったでしょう、パイプができ上がるまでは。

司会 そうすると、パイプオルガン設定のために、栄光館は相当な修理をされたのですか。

片桐 それはあまりありません。

駕淵 結局正面のうしろの壁を抜いて……
司会 壁を抜いてあそこにパイプを入れたんです。

駕淵 そういうことらしいですね。

山田 ご承知のようにパイプオルガンというものはオルガンだけが独立するものじゃない

くて、いまのお話にあるように建物にくっついちゃうものですから、ずいぶん技師がぶういっているのを横で聞いていました。ひじょうにやりにくいということですね。だから、うしろにとつてつたようなかっこうになってパイプ室ができた。しかし、あれは現在でも西日本で最高の設備だと思っています。

司会 ちょうどパイプオルガンがはいったころと前後して、だんだん日米間が緊迫し、キリスト教をバックボーンにした同志社の諸音楽団体も多かれ少なかれ、戦争に巻き込まれ、不如意な活動を強いられたわけなんです。音楽関係のクラブ活動はともかく、同志社本来の使命であるキリスト教教育について、その礼拝や讃美歌歌唱、またオルガン演奏等に関して、当時のお話をうかがえますか。

中堀 中学は当時軍人さんが校長となり、絶対に讃美歌を歌っちゃいけない。東方遙拝をして、「あさほらけ」ですか、「あさみどり」ですか、何か御製を奉唱するんです。

駕淵 女学部のほうは、かなり最後まで栄光館で礼拝をしていたんですけれども、まず東向いておじぎして、ということから始まり



有賀のゆり氏

ました。あくまでも自由出席という形でしたけれども、幼稚園のホールで、とにかく毎日礼拝をやりました。栄光館ではできなかった。

野村 末光先生が、それを守り抜いたわけですね。

司会 中学では礼拝はございませんでしたか。

中堀 ありませんでした。「守るも攻めるも」といって、こうして（肩をいからせて）歩いておった。

司会 戦争中は同志社もずいぶん変わりましたねえ。聖書はおおっぱりに読めない。チャペルの前には、でっかいご真影の奉安所ができてましたね。

そういうことから、同志社の音楽も、キリスト教的な魂というものが、だんだんなくなったと思うんです。昭和十年時代は、同志社の暗黒時代でしょうな。

片桐 もう、音楽なんてものは、考えもできない時代でしたね。

司会 しかしそういう時代にも、かつて女学校とか中学校で教育された方が、りっぱな音楽家になられ、苦しいながらも音楽活動をしておられたことは注目にならざるを得ないと思いますが、山田さん、たしか戦争中私どもは栄光館で、日本的といったらよいか、そんな音楽会をしたことがありましたね。

山田 きょう、おいでになってませんけれども、京都の作曲家で、日本的どころか、国際的に知られているのは、何と云ったって中瀬古先生ですよ。戦争中に中瀬古先生の「作品発表の夕べ」を催したことがあります。これはやり方をちゃんと心得ていましたね。日独伊防共協定だから、ドイツ文化研究所を使って、中瀬古先生はドイツで修業なさってヒンデミットのお弟子だというわけで……。そこらを強調したわけです。しかも私の場合、ぐあいのいいことには、満州事変の最後に兵

隊に行つてけがをして帰ってきた傷痍軍人だったので、一応兵役は免除されている身ですから、最後まで頭の髪をのばして、演奏会の指揮をしていた。何もおかしな歌はやりません。会のはじめに「君が代」をやるだけで、あとは正規の演奏会をちゃんとやりました。西邸さんとはあのとき中瀬古さん作曲の伴奏で詩の朗読の夕べをやりましたね。

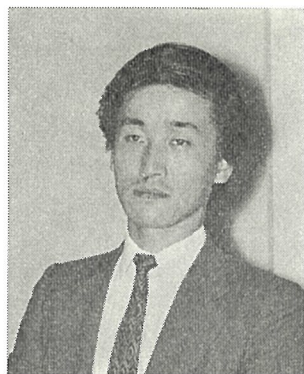
野村 あの当時でもデントンさんは、音楽会によく来ておられましたよ。拍手が少ないうから、もっと拍手をしろなどとインスパイヤされたこともあります。

片桐 とにかく戦争中も、婦人の宣教師で日本に残るといふ決意をされた偉い人ですよ、デントン先生は。

司会 あのときに、日本に最後まで踏みとどまった米人は、デントンさんとカレッジソングの作者、ボーリズさんだけでした。

片桐 そして戦争が終わったならば、いの一番に日本人の偉いことを説明する。けつして自分を迫害したりする民族じゃないということをおアメリカ人に知らしめるんだと、こういっておられました。偉い方ですよ。

山田 そのころ、同志社の事件として頂点



津田能人氏

になるのは、湯浅総長の勅語事件です。私は先生から、そのいきさつを詳しく聞いたんですが、最後の抵抗だということなんです。いちばん最後まで自由と平和を守るのは宗教者ですよ。これが湯浅さんの持論です。

司会 中堀先生もご苦労になったと思いますが、あの時分、同志社は、ほかに比べて音楽の盛んな学校だったと思いますが、戦争に関連した活動はどうだったんですか。

中堀 中学しか知りませんが、中学で、当時の野村校長が、私にまず教えさせたのは「青葉茂れる桜井の……」で、それでホザナ・コーラスがそのころ歌われたのは当時の音楽学校が作曲した「特別攻撃隊」なんです。

司会 有賀先生なんか、女学校在学時代で

したね。迫害について、何か思い出はありますか。

有賀 私、女学校の一年のときに杉原みち先生、二年目に加藤テイ先生にいました。戦争申だったけれども、その先生方は正當な音楽を教えてくださいました。軍歌なんかやらなかった。校長先生が、そういう束縛をなさらなかったんだと思うんですけど、私なんか、それで「歌」ってとてもきれいなものだということがわかって、楽しかったんです。

司会 クラップさんとか、ほかの宣教師の方は、もうおられませんでしたか。

有賀 戦争中だから、クラップ先生はいらっしゃいませんね。それから三年生だったかときに先生が変わって、「学徒出陣の歌」だったか、へんな歌を歌わされましたけれども、おそらく強制されたと思うんですが、それでいっぺんに音楽がつまらなくなってしまうて……。

司会 もう一つ、戦争中でひじょうに印象に残るのは同志社イブが栄光館でございましたが、そのときクラップ先生が混声合唱の指揮をされんとしたとき二階にいた大学生が紙

をつばでまるめて、先生めがけてパツと投げたことがある。先生はひじょうに憤激されて、指揮をやめて入ってしまったわ。どういふことになるかと思いましたが、寛大な気持ちになられたのでしょ、それは許されて、もう一度出て来られましたかね。そういうあわただしい空気が同志社にありました。

そういう惨たんたる暗黒時代があったんですが、昭和二十年、日本は大変化をきたしたわけで、それからというのは、反対に同志社が、時代の脚光を浴びてきた。いちばんはじめに米国から同志社に帰ってこられたのは、英語のグイン先生と音楽のクラップ先生じゃなかったでしょうか。

片桐 ブランケットだとか、簡単な食品なんか持って、キャンプ生活をするつもりで帰ってこられました。えらい勢いでしたよ。

司会 戦争中、グリー、プリムローズ両クラブが合併して、同志社男性合唱団といったものが、戦後はグリー・クラブになり、その性格は、宗教音楽とともにほかの歌も歌うという、つまり、プリムローズ的なものとして復活してきたわけですね。それから、女学校のほうでは、昔ヒバード先生が指導して

おられたフレンドリー・コーラスも復活してきました。ちょうどそのころ、山田忠男先生が同志社に迎えられたんじゃないかな。

山田 湯浅先生が帰っていらして、昭和二十二年の夏からお声がかかりまして……。そのころはまだ、頭もまっ黒だったな。そのころ本宮さん、あなたはまだ学生で、学部を二つ出たんでしたね。

本宮 はい。

司会 本宮さんはそのころ、オーケストラの中心勢力で、バイオリンを……。

本宮 戦後の最初は二十一年のイブに、宮本さんの指揮でコレリーの「クリスマス・コンチェルト」をやりました。

司会 本宮さんはひじょうに熱心であった



小 倉 恵 子 氏

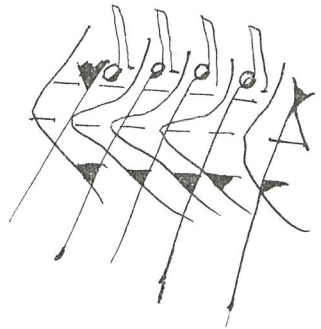
ことを覚えていますが、そのころに、湯浅総長や片桐先生あたりのご主唱で、新しい教育ということが世間の注目的となってきた。

英語では、グイン先生のすばらしい英語教育を見習いにくる。音楽では、京都の音楽史を書いた中原さんのものをみると、クラップさんは音楽の神様みたいに崇められているんですね。上野の音楽学校出身者といえども、クラップさんに伺いを立てたりして、アメリカの音楽教育を参考にしたいとかいう時代がやってきたんですよ。

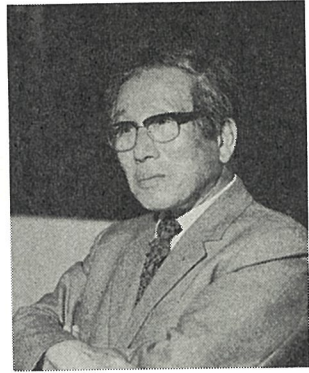
あのころから同志社に女子大学ができ、また待望の音楽科が誕生するわけですが、とにかく同志社はいそがしくなってきました。最初はヒバードさんが、外国との折衝や何かで、一年間学長になっていらっしゃいましたね……。

音楽科誕生のころ

片桐 終戦後、新しい六・三・三制の実施で、四年生の大学というものができて、同志社の共学のはうは二十三年に昇格しております。女子大のはうは、前からの意願であった、同志社に音楽科というものを設立したいとい



う希望をもって、それで一年遅れているわけなんです。そして、外国人は向こうのほうから遠慮して、けっして行政の地位につかず、平教師として同志社に奉職するという伝統的なものがあつた。それを湯浅総長と私らが、ヒバード先生を学長にして、新しい制度に合致するものをつくり出すという、ひとつの政策的なところもあつたわけですね。そして、英文科、家政科に音楽科というのをつけ加えて、「リベラル・アーツ」を訳して「学芸学部」という名前にして、新しい組織の女子大学をつくった。文部省も相当問題視しておつたんですが、学芸学部という名前で行ったわけです。こういうふうにして、ようやく達成できたわけです。同志社学園として音楽科と



西 邨 辰 三 郎 氏

いうものを学校組織のなかに入れたのは、はじめてでしょう。

司会 画期的なことですね。

山田 先生は京大時代から、メッテルさんの指導で、朝比奈隆さんとか、そうそうたる連中といっしょに、いろいろの音楽活動にご精進になって、戦後、同志社の正教授として、多面的にご活躍になったんですが、共学に、いわゆる音楽学部をつくる話は全然なかったんですか。

山田 私、京都大学でもいろんなことをやっていたんですけれども、当時のおえら方が「山田もいいやつだけど、音楽をやるから」というようなことで、欠点になっていたんです。しかし、同志社では、これを長所にみてくれ

るようになったんだ。だから、非キリスト者であっても、ひじょうにうれしかったですね。

それからもう一つ、ほんとうに広い野原に出たような気がしたんだ。というのは、官僚主義というものが、とくに戦争中から戦後にかけて、京大にいた間、身にしみていましたからね。それからこれは片桐先生のほうがお詳しいんですけども、「リベラル・アーツ」という考え方に、つまり今の言葉でいえば一般教育に音楽を取り入れるということ、これはいいんだ。西邨さんといっしょに「同志社ボーカル・フォア」をやっていた民秋さんが、「山田さん、ひとつやろう。」、教養科目のなかに音楽をせひ置こう、というんです。

しかし、やはり隠然たる反対もありましたね。つまり、女子大にああいうものがあるじゃないかというんですが、あつちが専門家をつくるという立場でやりになるだろうから、こちらの教養に音楽というものがあつていいじゃないか、いまでもそう思っています。

司会 女子大に音楽科ができてから何年になりますか。

片桐 もう二十四年ですね。

鷺淵 結局、女子大ができたときから音楽

科があるわけですから。

司会 専攻科目は、声楽とピアノとバイオリンですか。楽理はないんですか。

鷺淵 専攻としてはないんですけども、女子大の行き方としては、単に技術的な面だとか、実技のことだけに一生懸命になるんじゃないくて、理論とか音楽史の方面、音楽に関するあらゆる教養をしっかりと身につけさせようということ、理論なんかでも毎度、毎度宿題を出して訓練されたわけです。いま私なんかも、フウフウいいながらも、毎度学生には宿題を出して訓練をして、あなたたちは、ただちょっと歌えたり、ひけたりしただけで満足してもらった困るということを教えているわけなんですけれども、われわれの意思がどこまで通じているか、ときどき疑問に感じます。

司会 同志社の音楽部の出身者のなかには演奏家としても、音楽家としても、相当社会に貢献しておる方がたくさんあると同時に、また、いわゆる教養ある家庭の主婦として、よい家庭を育成しておられる方もたくさんあると思うんですが、家庭にはいれば家事に没頭して、音楽で世に問うということがあまり

ないのじゃないか。これは私の思いがちがいかもわかりませんが……。

鴛淵 いまいわれたような傾向は、ひじょうに強いです。小倉先生なんか、ひじょうに例の少ないほうです。

司会 小倉先生は、ご結婚なさって同志社中学で一生懸命教えていらっしゃる。音楽家としても、家庭でも一生懸命にやっていたらっしゃるという、こういう例は少ないですか。

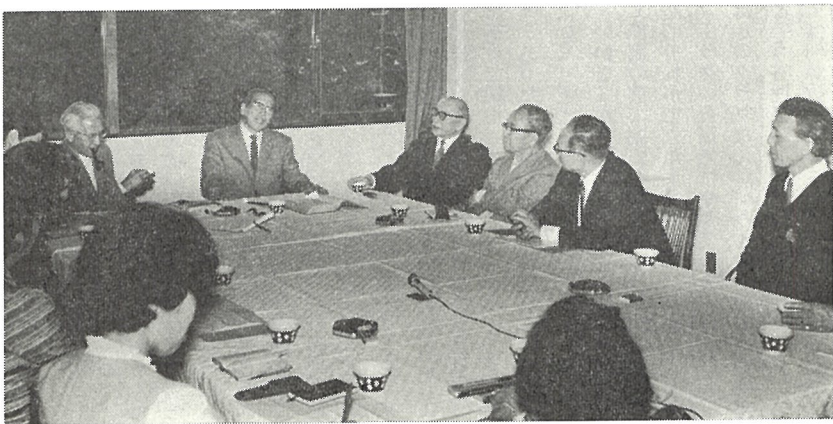
鴛淵 割合として、ひじょうに少ないです。

小倉 鴛淵先生の第一回の生徒が私です。音楽科の五回生になるわけです。いま聞きますともう二十数年になるというので、ほんとうに月日のたつのは早いなと思っております。先ほどから、いろいろ大切なお話を聞かせていただきまして、教育者の端くれではありますけれども、一個の人間としてことに幼い心・魂を教育していく上で、音楽を教えて行く私たちはすごく責任が重いと痛感しています。同志社の長い歴史の中でみてみますと、現在はおたくさんの音楽団体もできて活躍してはいますが、必ずしも満足のいける状態であるとはいえないと思います。同志社イブ音楽会も昔のように家族的なものではな

く、全同志社燭火礼拝もなくなってしまつて……。これから先も私たちは重大な責任をになつていくんだなということを痛切に感じております。そういうことについて、私たちはこのお話しの際階から、さらに考えていかなければならない大きな課題をかかえているということを感じて、ぜひ、先生方と話し合いたいと思います。

司会 同志社中学はうまい先生をもらったものだと思つて、うらやましく思つておるんですよ。有賀先生のお父さんは熱心なクリスチャンで、同志社の神学部長をはじめ、京大の文学部長や神戸女学院の院長なども歴任された教育者であられますし、有賀先生自身もアメリカやドイツ等でのご研さんが深いんですが、同志社の音楽教育、とくに女子大の音楽教育についてどのような抱負をもつていらっしゃると思いますか。

有賀 先ほど、鴛淵先生もおっしゃいましたが、私も同意見で、やはり音楽といつても、ただ上つらの技術ばかりをまねるようなことをしないで、その根底にあるものを探らなければならぬと考えるのです。現在日本は、ある程度、表面的には欧米の文芸に迫りつい



てきたというか、あるいは先を行っていることもありますが、本質的な点でどこかおかしいのではないのでしょうか。やはり、ひじょうに地味ですが、いまいったような教育法で、根気よく続けて行くべきではないかと思えます。

私は、アメリカやドイツに留学して感じたんですけれども、西洋音楽がああいうふう成長してきたというのには、ひじょうに長い歴史があつて、なみなみならないような苦勞もあり、いろいろな思想や様式の変遷を経て、そして現代まできているわけなんです。そういうのを飛び越えて、果実だけをまねするというのは、結局、モンキーにすぎないと思います。そういう意味で、音楽部の学生でも、できるだけ自分で考えて、それぞれ個性を養っていくというのでしょうか、自分の表現としての音楽というものを生み出していくてくれればいいんじゃない。

キリスト教主義と音楽

それから、キリスト教主義と音楽というところで、私自身音楽を好きになったのは、子供のころから讃美歌を歌っていたり、父の

伴奏をさせられたり、そんなことで知らない間に好きになったわけですが、そこにとどまっていちゃいけないと思えます。キリスト教の音楽とは、何となくセンチメンタルでムード的なものという観念がありまして、これは日本の「讃美歌」が、ほとんど十九世紀の、とくにそういった傾向の歌からなっていることによっているのですが、このような

ムードにひたることがキリスト教の雰囲気味わうことであり、キリスト教主義であるからには、このような音楽を育てるべきだ、といった固定観念から脱却しなければいけないのです。先ほどの話に出てまいりましたように、教会とキリスト教主義の学校は、たしかに一昔前には、音楽的に日本の一般社会よりずっと進んでいて、若い人をひきつけ音楽家を育てる原動力のひとつともなりました。でも、いまは情けないことに、そのマンネリズムと音楽に対する認識の甘さから、すっかり立ち遅れてしまいました。これでは、教会やキリスト教は、日本の音楽や文化生活に影響をあたえることはできないのです。これから私たちは、キリスト教主義と音楽の問題を根本的に考え直さなければいけないと思

います。真剣に音楽と取り組んでいる人は、たとえクリスチャンでなくてもそのことを感じていきます。

司会 津田先生もやはりクリスチャンで、そしてオルガンのご専門でいらっしゃるんだけれども、岩倉にいらっしゃってのご苦勞とか、あるいは喜びとか、いかがですか。

津田 最近、中堀先生のおとを継ぎまして、ホザナをやっていますけれども、岩倉の例では、ホザナのメンバー一人ひとりの考え方というのは、昔とはずいぶんちがうし、ぼくが来てから後も変わっているということですね。たとえば、宗教的なものの考え方しても、ぼくが来たときには、始まりはもちろん、お祈りで始まったし、そういうけじめはカッチリあったんだけど、最近の高校生をみていると、そういう雰囲気としての宗教性といえますか、たとえばどこかに旅行に行つて旅館の前で朝の礼拝をもつとか、前は、自然にそれができたようですね。いま、ホザナ・コーラスの合宿ではやっていますけれども、ほかのクラブなんか、みんなで讃美歌を歌うという雰囲気がないみたいで、そういった点では何か抜けているみたいで、やりにくい

いうことはちょっと感じています。

高校生はほんとうにやんちゃばかりですから、讚美歌を歌うというより、いまはやってるロックとか、フォークとか、ああいう音楽が彼らにいちばん親しいものであって、ほかから教えているのは、ちがう世界だというふうな考えがありますから、いま有賀先生がおっしゃったようなことも大いに大事なことだと思っただけでも、高校生には、そこらへんのところが、なかなかむづかしいと思いますね。

それから、大学の学生なんか聞くんですけれども、大学へ行って音楽がないというのは、やはり、さびしいらしいですね。総合大学ですから、何か、音楽概論みたいな、あるいは西洋音楽史の概論的なものでも、ちょっと入れてあげたら……。音楽を聞くという態度が、やはり学生にもないとよくないと思うんです。そういう美意識といいますか、東京なんかでは、総合大学にはあるように聞いているんですが、それが同志社にないというのは、おかしいなと思いますね。

司会 女子大のような形の音楽部は、いままぐ共学の大学にはむづかしいと思いますけ

れども、多数の大学生は、音楽というもののに渴をおぼえているわけです。それで現実には、自ら同志を集めて、なかなか熱心にやっています。しかし、今日では、宗教音楽からはじまったグリーなどは一時よりはメンバーが減って、そのかわりもっと自由というか、インスタントというか、あのきちょめんな基礎訓練はめんどくさいから、それよりは、好きなときにやって、楽しめる種類の音楽に向っている学生たちが非常に多くなりました。二時間も三時間も厳しい訓練をうけて、ステージだけで覇を争うようなことはあまり意味がない、というようなことを考えている学生もあるようです。しかし汗と脂で協同して同志社らしいよい音楽を創造してゆくことが、どんなに意味深いことであるかということを主張する学生たちのあることも見逃せません。が、この辺、山田先生いかがでしょう。

山田 やはり宗教という問題を抜くわけにはいかないでしょうけれども、フリーな立場での音楽があつてしかるべきだと思うし、二十五年前からそういう芽が出かけたものを、やっておけばという後悔はしています。

もう一つ、私、大事だと思つことは、日本

古来の音楽をご承知にならん方が多いんだな。あ。いちばんいいのは、教養に一つ置いて、「音楽史」とか、「音楽美学」というものを、教養の立場で扱えばいいと思うんですけれどもいまはご承知のように、片桐先生時代とちがいで、同志社大学では一般教養というのは敵視されていますよな。

いま、中川牧三、宮本政雄、中原昭哉、北原篁山、あるいは酔っぱらいの歌の仲間とか、それこそぞうりはいてギターを持って、フォークソングを歌っている。同志社出身者でずいぶん活躍しているのがありますね。あれも、あれでいいと思うんです。全然、宗教も何もないんだけど、そういうものが出るのが同志社じゃないかとも思うんですが、教養として科目を置くことと、必ずしも関連はないかも知れませんが。

司会 昭和二十六年秋、香里に同志社ができて、礼拝を始めるとか、讚美歌が必要だというわけで、私は初代校長の山田貞夫先生にひっぱられて香里に赴任したのですが、本校とはずいぶん違った荒野のような雰囲気。最初はびっくりしました。それでもスポーツの好きな生徒はもとより、音楽の好きな生徒が

ずいぶんいるようにも思えたので、私は、さ
さやかな使命感からも、讃美歌をはじめ一般
歌曲を練習するオルフォイスという男声合唱
団を作りましたが、今では、みな元気で歌
い、父兄たちも後援会を作ってくれるほどの
理解を示してくれたのは、ありがたいことだ
と思います。ことに着任後まもなく、同志社
のおかげで、米国のウェストミンスター大学
へ留学し、有名なウィリアムスン博士に教
わりましたが、宗教音楽の美しさを満喫する
ことができました。あのころすでにアメリカ
でもフォークやロックの問題も出ていました
が、有賀さんや篤淵さんは、ああした音楽熱
をどう教育してゆけばいいと思われませんか。

有賀 楽しみでやっていらっしやるのは、
それで意義があつていいんじゃないかと思う
んです。ただ、いまのところ同志社のなかで
音楽のほうに進みたいといったら、女子より
その道がなく、男子の方でちゃんとした教育
機関があれば、音楽でいきたいという人が、
ずいぶんあると思うんですけれども、結局、
同志社ではそれが受けられない。ひじょうに
残念だと思います。

本宮 二十四年に女子大ができたときに、

私らはまだ学生で女子大の先生のところにお
しかけて、男の学生にも講座を解放しろとい
ったんです。とても壁が厚くて、全然だめで
したけれどもね。もっとも、私らのときは男
子校には音楽というものがなくて、いきなり
オーケストラ活動に突っ込んでやっていたわ
けでしょう。ですから知りたい、学びたいと
いうことがいっぱいでしたが、これだけの大
きな学園ですから、やはり学びたい者に、講
座はぜひ設けてほしいと思います。

司会 神学部では、このころ、宗教音楽や、
礼典に関する講座がなされているのでしよ
うか。たしか、友人の深田未来生兄がやって
いたこともありましたが……。

有賀 数年前に、深田先生の授業に一度よ
ばれていて、教会の音楽について話したこ
とがあるんですが、最近では、「礼拝学」の一
部として、「教会音楽」という通年の教科が
設けられ、洲脇先生が教えていらっしやいま
す。

司会 これらのことは大いに盛んにしても
らいたいと思います。大学には有名な学生聖
歌隊（D・S・C）があつて、花の日礼拝やキ
ヤンドル・サーピスなどは、すでに京都の名

物だときえいわれていたのですが……。

小倉 花の日は、花の日礼拝をずっと続け
てきましたしね。また、キヤンドルは若い生
徒たちにもずいぶん人気がありました。聖歌
隊がなくなりましたし、すごく残念なことが
たくさんあります。

司会 最後に、これだけは同志社の音楽と
しては残しておきたいとか、これだけは注意
すべきであるとか、進展さすべきであるとい
うようなことがありましたら、どなたでもけ
っこうですが……。

本宮 先ほど、ロックがどうかということ
でしたが、それよりももっと望ましい音楽を
いかにして育てるかということを大いに論ず
べきではないでしょうか。合唱のほうもいろ
んな問題があるでしょうが、とくに器楽合奏
関係は全然バラバラで、おそらく単一校では
できないと思うんです。できれば同志社の全
部の中・高が一つになって、ほんとうに正し
い、望ましい音楽をつくるように、われわれ
が連帯して努力すべきだと思うんです。私、
ひところジュニア・シンフォニーなんかやっ
て、野村先生にご協力願ったんですけども、
いまは全然ありませんし、いちばん近い高校

ともバラバラでし……。

国際的な活躍を

山田 もう一つ、余分なことですが、私、教育委員長を十年ほどやっていたのでいうんですけれども、音楽のいわゆる指導要領の改訂というのが、十年ほど前にあったんです。小学校の始めから、みな楽器の演奏をするようになった。これがそろそろ大学にくるころになっているんですが、それに対応できるような形が大学には要ると思いますし、それからもう一つは、さっきの講座の問題もありますけれども、間もなく同志社も一〇〇年になりますから、その総括として——そんなことを総括じゃありませんよ(笑)——ぜひ、さきほどもおっしゃったように、音楽のあるべき姿というものを、内外の関係者が集まって論議し合うことは大事だ。それでなきゃ、総合学園の意味がない。そして、宗教音楽の問題なんです、共学の大学が、最もこの空気が希薄ですからね、そのへんの反省もほしい。

あるべき将来の姿というか、もっと国際的な意味で活躍してほしい。マンドリンなんか

ドイツからも認められて同志社だけが、ドイツへ演奏旅行をするということをやっているが、そういうふうな国際的な活躍が、同志社なればこそ、あつてしかるべきだと思いませんか。軽音楽もアメリカに行きました。

野村 同志社全体として望ましいことは、一昨年、大江前庶務部長のもとに、学園内各音楽関係の先生方がその力を結集して刊行した「同志社歌集」にみられるように、再び盛大な同志社タイプの音楽会、あるいは、全同志社クリスマス音楽礼拝、花の日、収穫感謝、イースター等の音楽礼拝が行なわれること、とくに、目前に迫る創立一〇〇周年の祝賀には、すばらしい音楽の祭典が行なわれることを念願しています。

また、前の時報にも希望を申し上げました通り、音楽を専攻する者が女子大に限られるのでなく、男子とともに学び得る同志社音楽大学の設立を強調したいと思います。有賀先生もおっしゃったように、混声合唱、大管弦楽の演奏は、共学であつてこそ容易であり、オラトリオやカンタータ等の宗教音楽を上演するには、女子学生だけでは無理ですから、いまの女子大音楽科を音楽部にし、男子に門

戸を開放してほしい。さらに、音楽は幼少のころから親しみ、励まなければ、大きく開花結実するのはむづかしいとされていますので、小学校の開設と、同志社少年少女による合唱団や管弦楽団が設立されて、子供の音楽教室が開かれたらどんなにすばらしいかと思ひますが……。

司会 きょうはほんとうにありがとうございました。

ますます同志社の音楽教育の振興のために、お互いに協力をさせていただきたいと念願をしてやみません。

